

観光フィールド大学・加賀温泉郷まるごとキャンパス

平成25年度 東京大学体験プログラム参加レポート

実施日:平成 25 年9月 17 日～21 日(4泊5日)

【参加者】

1. 東京大学経済学部経済学科 4 年 石塚 優花
2. 東京大学文学部思想文化学科 3 年 物部 真由子
3. 東京大学工学部都市工学科 3 年 今村 桃子
4. 東京大学法学部 3 年 佐々木 麗
5. 東京大学文科三類2年 前田 歩

「加賀市の観光政策に対する提言」

東京大学経済学部経済学科 4年 石塚優花

①はじめに

私は、今回の体験活動プログラムで初めて加賀市に訪れました。駅を出て車を走らせれば見渡す限りの緑が広がり、それぞれ個性をもった素敵な3つの温泉街があり、海と山に囲まれたたくさんの美味しい食材に恵まれている……。加賀市のことを知れば知るほど、日本の観光地としての魅力が十分にそろっていると思うようになりました。

しかし、なぜか加賀市の観光客数はかつてに比べれば大きく減少しています。実際、東京にいて、旅行しようということになっても加賀市の名前が上がることはあまりありません。このレポートでは、わたしなりにこの原因を特定し、その改善のための政策を提言したいと思っています。

②観光客数減少の原因について

この原因は2つのパターンが考えられます。1つは、加賀市が提供できることが今の観光客のニーズに合っていないこと、もう1つは、加賀市よりほかの観光地の魅力が増したことです。加賀市自身ができることは、前者に関するものだけなので今回はこのことについて考えようと思います。

「今の観光客のニーズ」とは何でしょうか？私達が旅行をするときに行き先を決めるプロセスの第一段階は「何がしたいか」を決めることです。温泉にいきたい、紅葉がみたい、海にいきたい、など様々です。つまり、加賀市を目的地の候補として選んでもらうためにはまず、温泉地としてのブランドが必要になります。これは、「加賀温泉郷」として3つの温泉地を一つにまとめてアピールしようという取り組みによって達成されていくことだと思います。そして、第二段階として「交通の便」を考えます。「交通の便」は都市から現地までの移動のことだけではなく、現地における細かい移動についても含まれています。例えば、京都は市バスが非常に発達していて、どこに行くにも非常に便利なことが観光客にとって魅力的なポイントの1つになっています。3つの温泉街を持ち、それぞれが決して近くにあるわけではない加賀市では、この「現地における移動」について特に考えるべきだと思います。現時点でも、キャンバスや lady Kaga 号があり、「現地の移動」における対策はされているのですが、実際現地に訪れた私にとってはまだまだ改善の余地があるように思えました。ですから、ここから先は「現地における移動」をどうしていくべきなのかについて、述べていきたいと思っています。

③現地における交通機関

(1) 電車 (JR)

基本的に温泉街には電車が通っていないので、都市から加賀市へ訪れる時に使うだけ、ということがほとんどだと考えられます。そして、電車で来る観光客が必ず訪れる駅は「加賀温泉駅」です。つまり、電車で来る観光客にしてみれば、加賀温泉駅が加賀市の第一印象を決める場所になる、ということです。しかし、実際に私が加賀温泉駅に降り立ったとき、「ここが本当に温泉地なのか」という印象を受けました。出て左手にはショッピングセンターがあり、目の前はただ田んぼが広がるのみ。将来的に、加賀温泉駅の周りは大きく整備されるということですが、温泉地だということをアピールできるような工夫をしていくべきだと思います。例えば、駅前に足湯を設け、お土産屋さんをもう少し前面に押し出して温泉玉子を売る、などが考えられます。こうして加賀温泉駅前も一つの観光スポットにしていけるといいと思います。

(2) キャンバス

加賀市内をまわるための代表的な交通機関はキャンバスです。観光客にもわかりやすい形で円を描くように経路がつくられ、観光名所全てを網羅できる非常に便利なバスです。しかし、実際に加賀市の自由散策の時に利用してみたところ、使いづらいなあとと思う点がありました。その中でもっとも改善すべきだと感じたのは、「それぞれの経路のバスが一方向にしかまわらない」というところです。それぞれの経路にある観光名所を順序よく回れたら良いのですが、行きたいところがピンポイントであったりすると、そこから帰ってくるのに非常に時間がかかることになってしまいます。それぞれの経路に逆回りのバスを増やすと本数も増えて、予算や人材の面で厳しいこともあると思いますが、「観光客が行きたいところに便利に行くためのバス」なので、経路を練り直す（たとえば思い切って海回り、山回りを一体化してしまうな）ことで逆回りのバスをつくることを実現すべきだと思います。

(3) Lady Kaga 号

金沢に訪れる観光客を加賀市にも取り入れたいということで生まれたバスですが、私は非常によい政策だと思います。金沢は全国でもかなり人が訪れる観光都市なので、どんどんその集客力を生かしていくべきだと思います。私は、このプログラムの後、金沢でほんの少しだけ観光したのですが、基本的にそこまで大きくない街であり、どちらかという中日中に見て回る観光名所が多いという印象でした。ですから、金沢で観光した後、加賀市にきて温泉に入り、美味しいものが食べられる温泉旅館に泊まる、というコースは非常に魅力的だと思います。このコースを考えている観光客を取り入れるために、Lady Kaga 号は観光客が温泉に移動したいと思う時間に本数を増やしたり、またこの「金沢市→加賀市コース」とともに宣伝していったりするべきだと思います。この政策には金沢市との協力

が必要になってくるでしょうし、その兼ね合いは私達が口の出せることではありませんが、非常に加賀市の集客力アップには貢献することだと思います。

④まとめ

実際に加賀市に5日間滞在しているいろいろ体験する中で、3つの温泉街のそれぞれの個性を総合的にアピールすることが大きな課題になるのではないか、と思いました。総合的にアピールするということは、その3つがうまく連携されていなければなりません。その連携も情報面であったり、交通面であったり様々です。「加賀温泉郷」という名前でPRすることなど、連携に関する政策はまだ始まったばかりで、すぐに観光客増加という結果には結びつかないと思いますが、気長にひとつひとつ課題を乗り越えていくことができると再び全国有数の温泉地となるでしょう。それだけの魅力を加賀市はもっている、と私は思っています。

最後に、加賀市市長の寺前様をはじめ、加賀市役所のみなさまにお礼を申し上げたいと思います。5日間という短い間でしたが、とても充実した日々でした。また機会があればゆっくり加賀市を観光したいと思います。本当にありがとうございました。

体験活動プログラム 加賀市観光フィールド大学 課題レポート

東京大学文学部美学芸術学専攻学部3年
物部真由子

5日間のフィールド大学、大変お世話になりました。
以下、体験活動プログラムで習った加賀市の観光政策について、気になった点
や参考になった点等をあげていきたいと思います。

1. 駅前の景観

今回最も気になった点です。

加賀温泉郷の玄関口となる、その名も加賀温泉郷駅ですが、駅前の景観があまりにもローカル的だと思いました。

駅を降りた瞬間にまず目に入るのはショッピングセンターであり、せっかくの美しい美術館も存在感がありません。

観光地として売り出していくには、お土産屋を置いたり足湯を作ったりなどして、駅から出てきた人に「温泉郷に降り立った」「歓迎されている」という感覚を与えるような景観にすべきだと思います。

またバスの乗り場ももう少しわかりやすい場所に設置した方が良いかと思いません。

2. 巨大観音像

電車の中からも気になっていたあの観音像ですが、せっかくあれだけ立派なものなので、温泉郷のシンボルにするのが良いと思います。

ただし、「実は温泉郷とは何の由縁もないバブル期の遺産」という今の状態では印象が良くないので、何らかの意味付け（こじつけ）を行って、例えば温泉郷を見守る大観音像ということにしてしまうなどして、シンボル化するのが良いでしょう。

3. スピリチュアルロード

これは名称が良くないと思います。

日本人は基本的に、「宗教」「スピリチュアル」と聞くと何か不気味な、オカルト的な、悪い印象を持ちがちです。

4. キャンバス

主立った観光地を全て通るこのバスはとても便利でした。

3温泉地をつなぐという役割も担っていたと思います。

ただ、ルートが一方通行であるという点だけが気になります（不便でした）。

本数を少なくしてでもよいので、逆ルートを作ったほうが良いです。

あと、ウェブサイトが少し見にくいです。

主に気になった点は以上です。

街湯や総湯などは本当に素晴らしい施設であり、町並みも美しく、Ladykagaの取り組みも大変有効だと思います。

後少しで北陸新幹線がやってきます。

これを機に、加賀温泉郷が更なる発展をとげることをお祈りしています。

今回は大変ありがとうございました。

「観光フィールド大学・加賀温泉郷まるごとキャンパス」 体験事業提言に関するレポート

東京大学工学部都市工学科都市環境工学コース 3年

03 - 130103 今村 桃子

1、背景

これまで、工学部都市工学科都市環境工学コースを専攻しており、環境問題だけでなく都市の在り方について、交通、景観、住宅、経済など多角的に学習してきた。観光集客に関する問題点を洗いだし集客数を増やすための改善案を検討するという本プログラムの目的において日頃行っていた机上の学習を実践することが出来るため、自分の身につけた知識をいかに活かせるのか挑戦してみたいという思いから参加した。また、石川県は訪れたことのない遠い存在の県であり、友人からいい場所だという話を聞いていたため訪れてみたいという純粋な思いもあった。三つの異なる温泉地や九谷焼、山中漆器に代表される加賀市の魅力について一つも知識がないところから、先入観なしにアピールポイントを探る。

体験活動プログラムを通じて興味を持ったことのなかった伝統工芸品に触れ、積極的な姿勢で体験・見学することが出来た。九谷焼については窯跡の見学・説明を受けて簡単な絵付けを体験し、九谷焼美術館にて歴史と実物に触れた。作り方から九谷焼と古九谷の違い、変遷とその背景や時代ごとの位置づけに至るまで詳しい説明をしていただいたことで、九谷焼は手間のかかる物だからこそ歴史を感じる質の良い出来上がりであり、今日でも着実に受け継がれていることを実感した。山中漆器についても同様な印象で、自由行動で訪れたろくろの職人の作業場では種類の異なる木々の柔らかさ、香り、型の使い方、彫刻刀を手作りするといった話を聞くことができ、様々な過程を経て素敵な食器が出来上がることに感激した。また、山中漆器はお椀のような典型的な形だけでなく、果物の形をしたデザート用の器やワイングラスなど斬新的な取り組みが見受けられ、伝統を守りながらも人々を魅了し続けようとする強い姿勢を感じた。

そして三つの温泉、山代・山中・片山津を訪れた印象はいずれの土地も個性が際立っていたということ。山代は古総湯を中心に旅館が立ち並び特に夜の灯りに風情があり、「温泉地」というくつろぐひと時を感じさせる場所であった。山中は鶴仙溪の遊歩道に三つの橋、山中座、芭蕉の館など歩いてまわると楽しめる「観光地」という印象だった。そして片山津は夜に立ち寄った程度のためか、斬新な温泉施設の街湯が目立つ一方でその周囲はあまり何もないこじんま

りとした「温泉施設がある場所」という印象に留まってしまった。

2、加賀市の活力

加賀市民 40 歳未満の人口は合併後から平成 23 年度に至るまで減少し続けている。転出は 20 代及び 30 代の働き盛りに多く見られ、10 代及び 40 代でも 100 人以上が平成 23 年度に転出している。石川県内での完全失業率第一位はデータとして残っているだけでなく、観光業の衰退と就職先のない状況はいまだに続いていると言えるだろう。

3、改善案

(1) 観光地として

加賀市には地元を愛する人々が多くおり、彼らは歴史を大切にしながらも新たな試みをしていた。試みとは具体的に、昔の家屋の再現または再利用である。何度も見かけた、堂々と地元の良さを語る地元の人々の姿は非常に新鮮に映り、加賀市の強みはここにあると感じた。しかし、各温泉地での観光地としての取り組みが具体的に見えてこなく、観光客を集めようとする雰囲気を感じないこともあった。

特に山中では観光客向けのお店があまりなく、定休日が多く、住民の生活の匂いが入り混じった空間だった点が挙げられる。観光地と思いながら歩いていると地元の酒屋やスーパー、住宅が立ち並んで隣接し混在しており、非日常を求める心持からは少々がっかりした。お店のシャッターが下りているのを目にするとやはり栄えていない印象を受けたため、地元の方向けのお店であっても定休日を減らしてほしい。地元の人々はそれぞれの温泉地や山奥の農地や伝統工芸品を愛しているが、それを観光として発信していこうとする姿勢はあまり持っていないのではないかと感じた。彼らの生活空間であって観光地ではない印象だ。山代は古総湯を中心に自分の目の届く範囲のものが全て観光地化しているため物足りなさを感じることはなかったが、一方で山中と片山津にはもっとたくさんのお店があってほしい。大衆的な土産屋や山中漆器の店、九谷焼の店、食事処、甘味処の数が少なかった。空き家を買って取り壊して観光客向けのお店を開業させたり、定休日を減らしてもらったり、全体的に「観光地であり」「活気がある」雰囲気を創り出したい。

(2) 交通の便の向上

最終日にキャン・バスを利用したがやはり運行本数が少なく一方方向のみの運行のためタクシーを 2 度利用することとなった。バスが今後整備されるようだが、それは加賀温泉駅前の病院への高齢者の足をつくるのが主な目的なようであるから、観光施設をまわられるバスの運行を現在よりも増やすことも検討

していただきたい。高齢者の足としてはミニバスや大きめの自動車を利用した地元に適した方法で、観光客の足としては団体も乗れる、栄えている印象を受けるバスを定期的に運行して欲しい。個人的には30分に1本運行していると便利だと思える。旅行に出かけようと思えば立ち出掛け先を決める際に私が重視するのはアクセスの良さであり、自分の家からホテルまでのアクセスとホテルから周囲へのアクセスの簡単なところを選ぶ。これを踏まえると、くつろぐことが目的であれば、各温泉地で歩ける範囲を楽しんで終わり、一足伸ばして隣の温泉地や古い民家を改装したカフェなど紹介していただいたものの街中に点在していたお店を訪ねることはない。せっかくの加賀市の強みを見ないで帰る人が多いと思われる。

提案としては、起伏の多い土地ではあるが人件費のあまりかからないレンタサイクルを挙げたい。海と川と湖と山があり、これらが近接していることが加賀市の強みであることを押し出しているのだから、それを実感してもらうには自転車がちょうどよいと考える。山道は舗装されていないのでハイキングコースを途中から設けるとよい。新たな楽しみ方が生まれるだろう。自転車であれば点在していても少々離れていても、自由に行動できるために「行ってみよう」という気が起きる。

4、考察

観光という視点からまちづくりの在り方や行政の取り組みに触れたが、予想以上に観光は多岐にわたる分野を内包していた。例えば、生活保護受給者数は観光業界の失速によって増加し、その解決のためには観光集客を増やし雇用を生むしかないとのこと。雇用の場が生まれにくい場で加賀市には観光という道のみが残されているのだろう。さらに財源の確保のために検討されている事項等を紹介していただき、観光というものは行政の行う一つの大きな市場及び財源であり、行政の規模に関わらず関係の深いテーマであるからして、加賀市に限らず永遠のテーマとなると知った。また、行政の扱う諸問題は正解不正解が明確でなく、公務員が遂行する業務の責任の重さと難しさを思い知った。今の加賀市の観光業は発展途上中である印象が非常に強い。新幹線の開通を受け、それに向けて新たな試みを増やすこと、そしてそれが首都圏で人々の目に映る程度にまで宣伝されていると今後の集客が見込まれるだろう。